

虐待経験 治療を難しく

女性性と

薬物依存

②

覚せい剤などの薬物乱用で6回も刑務所に入ったフミコ(38)は、小学校低学年の時から10年以上、父親の暴力と性虐待を受け続けた。父子家庭だった。

高校を中退した17歳の時、初対面の男にシンナーをもらって使った。一瞬で記憶がなくなり、意識が戻ると「スツキリして薬になった」。シンナーを買いに行くと、売人の男がニッコリ笑ってくれるのがうれしかった。

20歳代半ば、2回目の刑期を終えて出所した日に知り合った男に覚せい剤を勧められ、セックスの快感が高まることが分かると夢中になった。それまでのセックスの記憶は「とにかくくらくらして痛い」というだけだったから「クスリで薬になってもいいじゃないか」と思った。薬物で心になたをしていった。

「女性の薬物依存者の治療は、男性に比べ非常に難しい」。国立精神・神経センター(東京)の薬物依存研究部長の松本俊彦医師は、そう指摘する。「うつ病や摂食障害など精神障害を併発していることが多い。彼女たちの背

後には、親との離別体験や幼少時から虐待された経験など、過酷な生育歴が横たわっている」

ヒロミ(42)も8歳の時から数年間、親類の男に性虐待を受け続けた。

結婚して間もない20歳のころ、かつての性虐待の記憶が突然よみがえり、パニック発作を起こした。精神科で処方された薬を大量に服用すると、嫌なことはすべて忘れられ薬ほど便利なものはない」とその時思った。

覚せい剤を初めて使ったのは30歳代前半。2度目の結婚をして出産もしたが生活は苦しく、売春を繰り返していた。相手の5人に1人は覚せい剤を使っており、いつしか売春と覚せい剤はセットになった。

家に帰ると疲れ果て、子どものための食事作りもつらくなった。そんな時に覚せい剤を打つと、テキパキと家事ができた。夫は馬乗りになって暴力を振るったが、覚せい剤を打てば痛みを感じない。子

どもを大切に思っているのに、十分に手をかけてやれない罪悪感もあり、薬がなければ生活できなくなっていた。

4年前の春、電気、ガス、水道が止められたゴミのためのようなアパートから保健所に電話した。「私、覚せい剤依存です」。子どもの6歳の誕生日の2日前だった。

厚生労働省の研究班の調査(2006年)によると、女性の薬物乱用患者の3割以上が、幼い頃に虐待された体験がある。男性(2割)よりも高い割合だ。

松本医師は「感情表現を抑え込まれて生きてきた彼女たちが、自分の考えや思いを言



ダルク女性ハウスの壁には、参加者が心に浮かぶ不安を書いたメモが張っている。言葉にすることが自分と向き合うことにつながる＝三輪洋子撮影

くらくらし■家庭

まず自尊心の回復から

葉で表現できるようにすることが大切。それが、薬物に依存する心の回復に必要なプロセス」と話す。

ヒロミは、薬物依存者のためのリハビリ施設「ダルク女性ハウス」(東京)に入寮した。1日3回のミーティングに参加する。最初のころ、ヒロミはいいかげんな話をして、泣いたりわめいたりしていた。ある日、息子の話をする(ミキ39)の話を聞いて、もらい泣きした。自分のことを話せるようになったのは、それからのことだ。

フミコは、ダルク女性ハウスのプログラムに参加しながら夜間高校に通う日々。最近、薬物依存の専門家の集まり、性暴力の加害者男性の自助グループなどで自分のことを話す。「話しながら、自分のことを大事に思っている。この感じが大事」という。(文中の当事者は仮名です)

4歳と1歳の子がいる30歳代女性。不況で夫の会社の残業が減りました。収入減で生活が苦しくなり、私も週3回深夜のパートを始めました。子どもを預ける人がおらず、夫がいる夜間の方が出やすいからです。

ただ私の両親が反対。電話でもすぐにけんかになります。心配してくれる気持ちはわかりません。でも夫とよく話し合った上で決めたこと。夫は家事、育